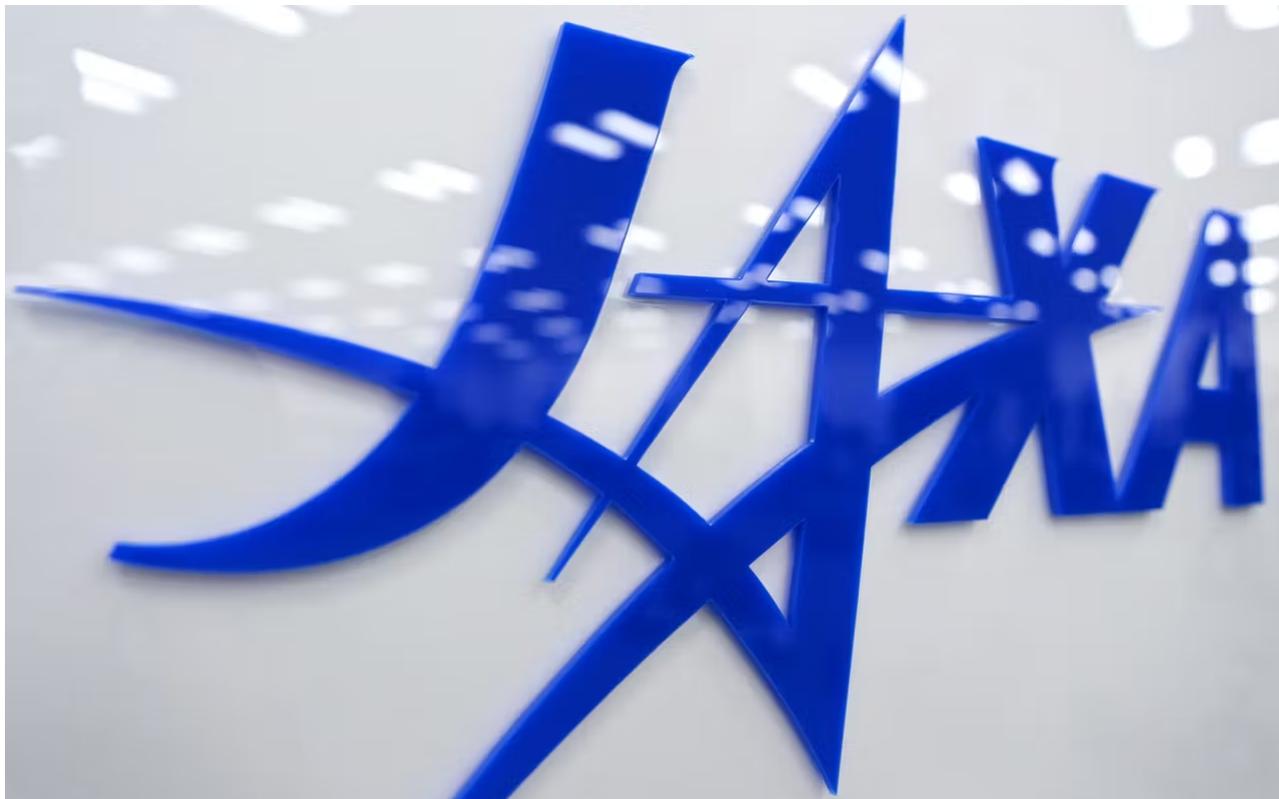


ロケットのエンジン爆発、装置溶融が原因 JAXA報告

2023/12/12 16:38 | 日本経済新聞 電子版



JAXAは2024年度後半のイプシロンS初号機の打ち上げを目指す

宇宙航空研究開発機構（JAXA）は12日、小型ロケット「イプシロンS」のエンジン燃焼試験中に生じた爆発は、エンジン点火装置の一部が溶けて飛散したためだと結論づけた。断熱材を損傷し、エンジンを覆う圧力容器が高温に耐えられなくなった。今回溶けた部分に断熱対策を施す。

文部科学省の有識者会合で報告した。燃焼試験の爆発について、従来の調査では圧力容器内にある燃料の異常燃焼も原因として想定していたが、追加検証でその可能性を除いた。点火装置の溶融は、設計段階では想定しづらかったとしている。

設計変更した点火装置の性能を確かめるため、今後は装置単体での試験などを実施した後、エンジンの燃焼試験に再び臨む計画だ。詳細なスケジュールは検討中としているが、初号機の打ち上げは2024年度後半を目指す。

燃焼試験は7月、秋田県の能代ロケット実験場で実施したが、点火後約57秒後に爆発した。この実験場の修復が当面難しいため、JAXAの種子島宇宙センター（鹿児島県）の設備などを使う見込みだ。

イプシロンSは固体燃料を採用する小型ロケット「イプシロン」の後継機として開発中だ。ただ、22年10月にはイプシロンの最終機である6号機の打ち上げに失敗している。燃料タンクの部品の施工不良が原因としており、該当部分の設計や検査工程も見直す。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.